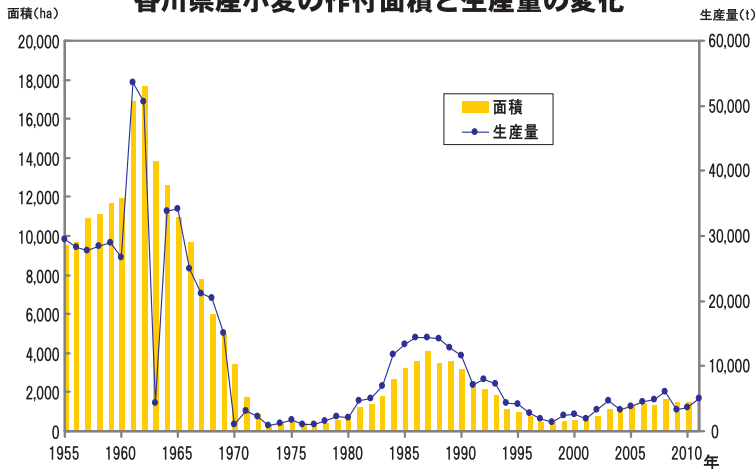


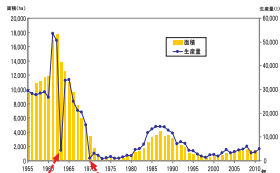
香川県産小麦の作付面積と生産量の変化



【ねらい】

小麦の自給率の低い現状や県内小麦の生産量の推移とその背景を理解するとともに、その結果として、大量の輸入小麦の長距離輸送により、大量の化石燃料が使用されていること、ひいては二酸化炭素の排出や地球の気温上昇に繋がっていることを示すことにより、地産地消や環境負荷の低減のための取り組みへの理解を深めます。

香川県産小麦の作付面積と生産量の変化



【資料解説】

このデータは、さぬきうどんの原料となる小麦の県内生産量の推移を表すものです。他の作物に比べ相対的に収益性が低く、作柄が不安定な小麦の日本における自給率は約1割と低く、その理由を香川県小麦栽培面積の変遷とともに考察することができます。

香川県は、温暖で雨が少なく、土地が麦の作付けに適したこと、水田裏作を中心に麦の栽培が盛んでした。江戸中期の1713年に出版された百科事典「和漢三才図説」には、「讃岐丸亀の産を上と為し」とあり、讃岐産小麦の優れた品質評価が当時から定着していたことが伺えます。

戦後～昭和30年まで

食糧増産の要請を受け、栽培面積は10,000～11,000haで推移しています。

昭和30年～45年まで

コンバインやトラクターなど農業機械や除草剤が普及し始め、昭和37年産の栽培面積は18,000haとなり、戦後における小麦生産のピークとなりました。しかし、昭和30年台後半以降の高度経済成長とともに、麦価格が安いことと労働力の不足等によって、麦作に対する意欲が低下しました。

さらに、昭和38年産及び昭和45年産で、収穫期の長雨により大被害を受け、小麦の生産意欲はさらに低下しました。（昭和38年の麦は、出穂期から降り始めた雨が57日間続き収穫皆無となりました。）

昭和45年～平成元年

農家の生産意欲はその後とも向上せず、昭和48年産の栽培面積は326haとなりました。

食料自給率の向上から奨励金の交付等により麦作の収益性が向上し、昭和62年には4,000haにまで回復しました。

平成元年～現在

早稲水稲との競合や農家数及び農業就業者の減少から、再び減少傾向に転じ、平成7年産の作付けは1,000haを割り込みました。その後、麦・大豆等の本格生産を図る施策が進められたほか、讃岐うどん用小麦として開発された「さぬきの夢2000」、またその後継品種の「さぬきの夢2009」の計画的な作付け拡大により、平成23年度は、1,590haと緩やかな回復基調を示しています。

出典：「さぬきの夢2000」ガイドブック（県農業生産流通課）

【関連する各教科の学習内容】

	中3	中4	中5	中6	中1	中2	中3
社会			我が国の農業 や水産業 の発展と国民の 健康・生活環境	世界の主要な国 の農業	地理 ○日本の農地（香川県を含む） 地帯の学習		公民
理科							
技術・家庭(技術)					食物の生産環境と生産条件 食物の育成に関する環境の適応性・選択		
家庭			日本の食料と国民の健康 環境に配慮した食生活の工夫		食料の生産と地域の食文化 家庭食生活と健康		